

特別寄稿

《地方の土壌から日本の花を咲かせよう》

E・タルカットは何故岡山に赴いたのか

——タルカット研究の謎をとく——

竹 中 正 夫

何故E・タルカットは岡山に移ったのか

——彼女を動かした岡山からの書簡——

神戸女学院の二人の創立者の一人、E・タルカット(Miss Eliza Talcott)は一八八〇年に岡山ステーションに移り、岡山を中心に地方伝道にあたっている。すでに知られているように、彼女はニューヨークの信仰の篤いビューリタンの家に生まれ、学校の教師をつとめたのも日本伝道を志し、A B C F M (American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下「アメリカンボード」)の最初の日本派遣独身女性宣教師としてJ・E・ダッドレー(Miss Julia Elizabeth Dudley)と共に一八七三(明治六年三月)に神戸に到着し、日本語を学ぶと共に、一八七五年十月から「女學校」の名の下に家庭的な女子教育をはじめ、これがのちに一八九四年から神戸女学院と呼ばれるようになった。

開校した学校には優れた素質をもった女性が集まり、私塾的な雰囲気の中に英語や聖書を中心に、和漢の書、万国

史や地理などの教科も教えられ、次第に学校としての形を整えつつあった。間もなく校舎の増築もあり、学校の前途には多くの期待が寄せられていた。決して順風満帆とは言わないまでも、学校は出発して五年を迎え、その築かれた基礎の上にこれからの発展が充分約されていた。そんなときに、一八八〇年、タルカットは神戸を去って岡山のスティーションに移っている。

従来からの研究では、何故タルカットが岡山に移ったのかには必ずしも充分に触れていない。それは、タルカット自身の決断によったのか、アメリカンボードの決定であったのか、神戸の女学校の内的事情によったのか。同じ時期に、ダッドレーは神戸の女学校を出て神戸女子神学校の設立にあたっているので、ダッドレーの影響があったのか。いろいろ臆測されるところである。

C・B・デフォレスト(Miss Charlotte Burgess DeForest)の英文の七五年史—*The History of Kobe College, 1875-1950*—をみると、その少し前に来任したV・A・クラークソン(Miss Virginia Alzade Clarkson)は、マウントホリヨークの出身で女子教育の経験があり、今までの私塾的な学校からカリキュラムを変え制度を整えた学校へと移行するようにはかったことが指摘されている。しかしクラークソンの教育方針との相違が、二人の創立者たちがこぞって女学校を去った原因となったとは思われない。

これまで通常考えられていることは、ダッドレーもタルカットも、もともと日本の伝道に深い関心をもっていたということである。これは、その後の両者の働きをみて一般的に考えられるところであるが、タルカットの場合、伝道に関心をもったとしても、何故岡山であるのかということが問いとして残る。

当時アメリカンボードは西日本に伝道を開始しつつあり、中国、四国、九州の各地に拠点を作る作業がなされつつあった。岡山にはすでに一八七九(明治十二年)にミッシヨンステーションが設立され、ベリー夫妻(Dr. & Mrs. John

Cutting Berry) ペティー夫妻 (Rev. & Mrs. James H. Pettie) ケーリ夫妻 (Rev. & Mrs. Otis Cary) ウィルソン (Miss Julia Wilson) などの宣教師が滞在していた。その上にタルカットを派遣することは、余程の必然性がないと普通では考えられないことであつた。またタルカットにしても、女性に向けた実際の伝道に当たるとしても、それは他の場所でも可能であつたが、何故岡山になつたのかということがもう一つはつきりしないところであつた。これは従来のタルカット研究の謎の一つであつた。

最近、神戸女学院卒業生で理事をつとめたカーター愛子氏から、タルカット宛ての長文の書簡が送られて来た。これは、岡山の中川横太郎の書簡を英訳したものであり、一二枚の紙にビッチリ手書きにしたものである。もともとは日本語で書かれたものを恐らく日本語に通じた宣教師が訳したものである(英文は筆致といい表現といい日本人によるものではない)が、その経緯は明らかでない。この文書はケーリ家の文書整理をしていたアリス・ケーリ氏(オーテイス・ケーリ夫人)からカーター愛子氏に送られたものでその筆跡などから当時岡山にいた祖父のオーテイス・ケーリ氏のものと思われる。

さて、この書簡の内容に入る前にその差出人である中川横太郎について記しておきたい。この書簡の終わりに Y. Nakagawa とあるのみで、それだけでは中川横太郎と決めることは出来ないが、文中数回にわたって Koume という名があり、彼女がキリスト教をさらに知るために神戸に来て学ぶように希望している記述もあり、これは中川横太郎の妾であつたが改心してキリスト者となつた炭谷小梅であると考えられる。従つてその書簡の送り主は中川横太郎と考へて間違いないと思われる。

中川は岡山県の役人であり、かねてから県の福祉活動に関心をもち、神戸に来ていたところたままた新島 襄の説教を聴き、それに感銘してキリスト教に関心をもちようになつた。さらに金森通倫と協力して岡山でキリスト教の普

及に尽力すると共に、女子教育やキリスト教による社会事業の進展に寄与した地方の篤志家であり、キリスト教の理解ある支持者であった。岡山教会に現存する史料には、中川横太郎が洗礼を受けたという記録はないが、この書簡を見ると彼のキリスト教への傾倒は並々のものでなく、この教えこそ邪悪と汚濁に深く染まっている日本を救うものであるという確信を表明している。そのみならず彼は、一八七九(明治十二)年から同志社英学校を卒業して岡山に赴任した金森通倫と協力して、キリスト教の伝道に決死の思いで当たろうと日々誓いあっていることが、二回にわたって、つぎのように表明されている。

"I and Mr. Kanamori have already determined sacrifice our lives and embrace this great work of salvation with our whole heart. Our present daily motto is 'let us conquer or let us die.'" (p. 7)

"Our present daily motto is not 'give us Okayama' but 'give us Japan or give us death.'" (p. 12)

従来の研究では中川横太郎がアメリカンボードならびに組合教会の岡山の支持者であり、キリスト教のシンパ(賛同者)であったことが知られていたが、これまで熱心にキリスト教を受け入れその伝道に主体的に当たろうと決意していたとは思われなかった。

さて、すでに多少内容分析に入ってきたので、この書簡の主要な内容を紹介し、タルカットが岡山赴任へと決意した背景を知ることしたい。

書簡は大体つぎの三つの部分から成り立っている。

- 一、自分自身の紹介とキリスト教とのかかわり
- 二、何故キリスト教が変革期の日本で必要とされているのか
- 三、何故キリスト教の伝道を地方(岡山)でなしてゆくべきかを述べ、そのために是非タルカットに岡山に来るよう

に要請して書簡は結ばれている。

それらの要点を漸次紹介しておくことにする。

一、はじめにこんな長文の手紙を送る失礼を詫びたのち、約五年前に自分が地方の人びとの福祉のために何を為すべきか探し求めていたとき、たまたま新島 襄の話を聞いた。それから岡山に宣教医 W・テイラー (Dr. Wallace Taylor) を迎えるよう努力したがミッシェンの都合で実現できず、少なからず失望したが、J・L・アッキンソン (Rev. John Laidlaw Atkinson) の訪問によって励まされ、その後神戸の女學校にタルカットを訪ね、親切な励ましに接した。「あなたは私の心に火をともし、あなたが私に与えたことばを口ずさんでいる」——と述べている。

キリスト教によつて自分の心身を洗い浄め、再生の道を歩もうと決心し、そのことを自分の愛する小梅に語ったところ、彼女はしばらく考えたのちにこう言つた。

「私たちの罪にみちた行為をやめて、この教えを心の底から受け入れて人びとにキリスト教を伝え、汚れの中にある思いを清め、人びとに救いをもたらしましょう。私はまだキリスト教のことを充分に知らないのです、神戸に行つてタルカット先生のもとで宗教教育を受けたいと思います」と。——中川は直ちにその願いを許したが、そうこうするうちに彼女は妊娠し、それを実現することが難しくなつた。この間ダッドレーとバロウズ (Miss Martha Jane Barrows) は岡山に赴き炭谷小梅を励まし、彼女は「昨年の秋」神戸に赴くようになった。恐らくこれは神戸女子神学校であつたと思われる。——

この春小梅が神戸に戻つて来たとき、私はかねてから計画していた仕事を始めようとして、小梅に、私の家に来てその仕事を助けるようにたのんだ。しかし彼女は私の家に来ることを拒み、私の新しい仕事に協力しないことになつた。そこで私も考え方を変えて、他の仕事をやめてキリスト教の働きを全力をあげてなすように決心するに至つた。——その間小梅が病を患つたがベリー医師の助力によつて回復し、中川も健康を害ねたが、漸く快方に向かいつつあつた。

そのとき、タルカットから手紙が届いた。彼はこう述べている。――「私が健康をとり戻そうとしつつあったとき、あなたの親切な手紙が私のもとに届きました。それは、あなたの優しいそして心からの示唆あることばを私にもたらししてくれました。金森さんがそれを私に読んできかせはじめると、あなたのお顔が私の心に浮かび、あなたがここにいて、まるであなたの唇からそれらのやさしいお言葉を聞いているようにさえ思われました。それ以来、私は私の心の中に、あなたに初めて神戸でお目にかかつて以来聞いたお言葉を想起しています。ですからここにあなたの働きについて私の考えを述べることをおゆるし下さい。」

二、現在の日本の状況は大きな変革の中にある。従来の古い因習や汚れた習慣や悪い行為は根深く残っており、その根底には古く頑迷な迷信があり、これらは変わってゆかねばならない。上流階級の中には西欧の宗教を抜きにした合理主義や享楽主義に走る者あり、中流の人びとはそれにならうと共に既存の迷信や因習から抜け切らず、多くの庶民はまだ眠りから目ざめていない状況にある。そして迷信を捨てるとき敬虔な宗教心をも捨ててしまう有様である。こうした状況の中で愛する三、五〇〇万の国民に救いをもたらすにはどうしたらよいかと問題を提起する。

三、――そこで中川は、キリスト教を通して日本を救おうとするならば、中央の都市に力を注ぐのではなく、地方の都市や日本の底辺である地方の町村に力を注ぐべきであると説く。丁度、美しい花を咲かせようと思うなら土に肥料を与えなければならない。植物の根を培うことが大切であるように、地方の人材を育てて中央の都会に送ることが大切であるとする。東京で重要な仕事をしている人びとの多くは地方から来た人たちであり、地方で人材の育成に当たり伝道をなすことの重要性を力説する。とりわけ女性の働き手が地方で不足していることを説き、タルカットに是非岡山に来て一緒に働くように訴えている。結びの部分はつぎのような切々たるアピールで終わっている。――

「ですから私はあなたが岡山に来て下さることを切望するものです。あるいはあなたは、岡山はあなたの働き場と

してあまりに小さいとお考えかもしれませんが。私も、私の働きにとつて岡山は小さすぎると思うことがあります。しかし私の目標は岡山県を私たちの働きの出発点とすることです。私は岡山のために働いているのではなく、日本のために働いているのです。私も金森さんも鳥のように、神が用いられるならどこへ出掛けていても働くつもりです。神の御旨であるなら私は残りの生涯を日本のために捧げたいと思っています。ですから現在の私たちのモットーは『岡山を与えて下さい』でなく、『日本を与えて下さい。さもなくば死を』です。このように救いの業のために私たちは準備しています。どうか岡山に来て下さい。そして私たちと一緒にキリストの精神をもつて地方の土壌を培い、やがてこの小さな島国の将来にキリストの花園の花が咲くようにしようではありませんか。私はあなたが来て下さるように祈っています。そして神に信頼し、神があなたを送って下さるように祈っています。あなたがよく考え、あなたの友人たちと相談して下さるように祈ります。私はこのことを深く考えて参りました。そして、あなたが岡山に来て私共と働かれることが神の御意であると思うようになりました。私はあなたのよい御返事をお待ち申しています。

敬 具

中川横太郎

なお、この書簡には日付がないが、前後の関係から察して一八八〇年の五月か六月ではないかと思われる。かくてタルカットは思案と祈りのうちに岡山ゆきを決心した。彼女が岡山に赴いたのは一八八〇年の九月であった。この書簡は彼女に岡山ゆきを決意させた歴史的書簡であったと言っても過言ではない。

（神戸女学院理事・同志社大学名誉教授）